

日本知財学会第 10 回年次学術研究発表会 セッションレポート

1. 作成者	原田 隆 (福井大学 URA オフィス リサーチアドミニストレーター)
2. テーマ	産学連携・イノベーション分科会セッション 「産学連携の新たな評価指標を考える」
3. レポート	<p>本セッションはまずセッションの導入として山本貴史氏（東京大学 TLO）よりわが国における産学連携を取り巻く環境及び用いられている評価指標の課題について報告が行われた。定義が曖昧なエビデンスのない指標により産学連携の評価がミスリードされ、イメージ先行による誤った施策が行われるなど悪影響がでてきている。このような問題意識をフロアと共有した後、3名の有識者による報告へと続いた。</p> <p>第1報告は小林徹氏（三菱総合研究所）による産学連携活動評価の国内外の動向及び評価のフレームワークについての発表であった。特許出願数などアウトプット指標から社会へのインパクトを示すアウトカム指標へと評価軸がかわりつつあり、そのための指標開発が国内外で取り組まれているとのことであった。このような現状を踏まえ小林氏は産学連携活動の多様性に着目、産学連携活動の体系から検討された評価の枠組みが提案された。</p> <p>第2報告は正城敏博氏（大阪大学）による現在の評価指標の曖昧さ及び評価の多様性についての発表であった。評価の環境依存性に言及された後、「達成度」に主眼を置いた現在の指標ではチャレンジングな取り組みを評価できず、パフォーマンス評価を歪めてしまう点を指摘、各大学が独自の評価指標をもつことの重要性が報告された。</p> <p>第3報告は石田正隆氏（関西ティール・エル・オー）により大学からの委託業務による要望の観点から産学連携の新たな評価指標についての考察が行われた。複数大学から効率的・効果的な出願などの知財活動支援、技術移転活動などについて業務委託をうける立場から「大学の研究成果がいかによりイノベーションの創出に貢献したか」という観点から指標を作られるべきであり、そのために大学の視点だけではなく企業からの視点も取り入れた指標および評価の枠組みが作られるべきだとの考えが示された。</p>